

New!

## 地域からの報告 ①北海道・幌延町

# 「処分研究」にも適さない 深地層施設

ルポライター 滝川康治（北海道在住）

「幌延深地層研究センター」の地下350mの坑道内で2013年2月6日、地下水の異常増水とメタンガス濃度の急上昇があり、2週間にわたり掘削作業が中断しました。このセンターは、原発の使用済み核燃料の再処理で生じる“核のゴミ”を地層処分するための研究を続けてきました。たまたま取材に訪れていたNHKが同14日に報道。日本原子力研究開発機構（旧動燃）は1週間以上も情報公開を怠り、北海道民は蚊帳の外に置かれたのです。

長い間“核のゴミ”施設誘致に反対してきた地元の住民グループは、「情報隠しの体質は以前と変わっておらず、許されざる行為」「こんな地質環境で研究をすること自体、問題だ」などと批判。原子力機構や政府に対し、あらためて研究計画の中止と幌延町からの撤退を求めています。

### 紆余曲折の末、始まった「処分研究」だが

日本最北の稚内市にほど近い、酪農が基幹産業の幌延町が、原子力関連施設の誘致を始めて30年あまりが経ちました。原発や低レベル放射性廃棄物施設の誘致に失敗し、1984年に浮上したのが動燃の「貯蔵工学センター」立地計画です。動燃関係すべての放射性廃棄物の「貯蔵」と、高レベル廃棄物の「処分研究」がセットの構想で、深地層研究センターはその中核施設でした。動燃は立地調査を強行しましたが、反対世論が盛り上がり、道は拒否姿勢を強め、90年に道議会も反対決議を採択。計画撤回の寸前まで追い詰めたのです。

しかし、動燃や政府は立地を断念せず、「処分研究」施設の単独立地へと方針転換。曲折の末、道は高レベル廃棄物の持ち込みを「受け入れがたい」とする条例制定と引き換えに、2000年に立地を受け入れました。“核抜き”を条件に地層処分の研究には協力する、と。05年に着工し、現在は換気用も含め3本の立坑が307～350mまで掘削中（4月14日）です。そうし



“核のゴミ”の地層処分に向けた試験が続く幌延の施設。最深部の地下水湧出量は数百トン/日。試験研究の適地もない（撮影：天笠啓祐）

たなか、冒頭の事故が発生し、地層処分はもちろん、「処分研究」の場としても適さないことが明らかになりました。

### より現実的な「暫定保管」

幌延での試験研究は「地下300m以深に“核のゴミ”の埋め捨てが可能」とのシナリオに基づくものですが、事はそう簡単ではありません。使用済み核燃料の放射能が安全なレベルに減衰するには10万年もかかります。日本の原子力開発が始まってから60年、1万年後に人類が生き残っているかすら誰にもわかりません。地震が頻発し、火山活動も盛んな変動帯に位置する日本列島に、地層処分できる場所などないのです。

日本学術会議は2012年9月、“核のゴミ”の「暫定保管」と「総量管理」を柱にして、地層処分政策の枠組みを抜本的に見直すよう求める報告書を原子力委員会に提出しました。「福島の大惨事が起き、ようやく、ここまで来たか……」というのが、幌延の経緯を追ってきた私の率直な感想です。

再処理を止め、原発の廃止時期を定め、“核のゴミ”の総量を確定させる。そして、使用済み核燃料のまま乾式貯蔵を行ない、少なくとも数百年間は地上か半地下で「暫定保管」するのが、よりましな選択でしょう。保管先は、電力の大消費地も含めて考え、徹底した議論が必要です。そうした方向に進むことができれば、幌延での「処分研究」は無意味なものになります。